

## 神学校日 説教 「み言葉の力に与る」要旨

東京神学大学 4年 榊原かをる神学生

日本キリスト教団藤沢教会 2022年10月9日

イザヤ書 6:1-5

ルカによる福音書 5:1-11

今日の聖書箇所は、漁師のシモン・ペテロが、仲間たちとともに、イエス様のみ言葉の力と、大漁の奇跡を経て、イエス様の弟子になるまでの話です。マタイにもマルコにも、ペテロたちの召命の記事はありますし、ペテロによる奇跡の大量の漁獲については、復活後の話としてヨハネにも書かれています。では、ルカはこの物語によって、私たちに何を示しているのでしょうか。

イエス様はガリラヤ地方を巡回して宣教され、多くの人々を癒されたので、その噂はあたり一帯に広がっていました。ある時、イエス様はゲネサレト湖の岸辺にいられて立っておられました。湖畔には網を洗っているシモンの姿があります。足を止めたイエス様がシモンをご覧になっています。聖書には、その時岸辺に立つイエス様の周りに、神の言葉を聴こうとしてイエス様のお姿を求める群衆が押し寄せていたとあります。

当時のカファルナウムは、交通の要衝地であり、流通のための水産加工業が盛んであったといえます。カファルナウムに住む漁師シモンが漁をするその湖畔にも、魚を塩漬けする加工工場や網元の舟屋、魚の市場などもあったのではないのでしょうか。そう考えれば、夜半からの漁を終えて、湖畔にいるのは漁から戻った漁師やその舟であり、シモンの仲間たちだけとは思えません。あちらにも、こちらにも、網を洗う舟と漁師の姿はあったのではないかと思うのです。

網を洗っているシモン自身も、イエス様のことを知っていました。少し前のこと、安息日の礼拝後に、イエス様はみ言葉を以て会堂で汚れた霊を追い出し、その直後には仲間とともにシモンたちの家に来てくださいました。会堂のすぐ近くには、シモンが兄弟アンドレや家族、しゅうとめと住む家があったのです。シモンは、貧しい漁師というよりも、豊かな資本をもつ安定した漁業者だったと思われる。その家は礼拝の後の会食の場としても用いられていたほどです。しかし、シモンの家では姑が熱を出して寝込んでいて、安息日前夜や礼拝後のもてなしも、ままたまなかったのです。イエス様は、枕元にて熱を叱りつけ、癒してくださいました。ですからシモンは、こ

のお方は権威と力のある方だということを知っていました。

湖畔のこの日のシモンは仲間とともに、昨晚の不漁に落胆し、押し黙って網を洗っていたのかもしれませんが。湖畔のただならぬ大勢の人の気配とイエス様に気付いて、ぼんやりと考えます。おや、あの方がここに来ておられる。そういえばあの晩には、会堂でのみわぎの噂を聞いて、町中の方がイエス様に会うためにうちに押し寄せてきたようだったな、と思い出します。皆が病気を治してほしいとあって、悪霊も追い出されて、あの時は驚いて、本当に感謝したものだ。シモンは思い返しています。しかしシモンは今、疲れているのでした。今日は特に関わることもないだろう。あのお方は、また病気を治したりなさるのかな。それであんなに人が集まっているのだろう。そんなことを思っていたのでしょうか。シモンは既にイエス様のみわぎに集まる人々をみてきたのです。今またイエス様の周りに押し寄せる群衆には、さほど関心がないのです。

シモンの興味は引かなかったけれど、イエス様の周りに、神の言葉を聴こうとする人が押し寄せていた、そのことは気にかかります。人が押し寄せるということは、相当な人数であるということです。聖書にあるそのことばからは、押し寄せることによる圧力が感じられます。押し合いへし合いしながら押し寄せる人々、神様のみ言葉だけを求めて押し合う人々。何もない湖畔の岸辺に、イエス様おひとりをもがけて、いったいどのくらいの人々が押し寄せることで圧を生じさせることができるでしょう。聖書の中の群衆という単語は、その人間たちがどのような性格のものであるかが判断し難いものです。漠然とした群れ、方向性がなく規律のない大衆であったり、イエス様の働きのための名もなき人々であったりします。しかしここでは、この群集は、神の言葉を聴きたい人々だということです。神の言葉を求めて集まり来る、神様の被造物として、これは望ましい群衆のひとつです。とはいえ、なぜ彼らが純粹にみ言葉を聴きたくて押し寄せた、ということがわかるのか、たくさんの人々の中には、イエス様の奇跡のみわぎに惹かれて、現に癒しを求めてきた人はいなかったのか。群衆をみているシモンの眼には、そのように癒しと

みわざを期待して集まってきている人々に映ったのではないのでしょうか。あの晩、自分の家に押し寄せてきた人々がそうだったのです。

イエス様は、岸を辿りながらシモンに近づかれました。おや、とシモンは思うでしょう。イエス様には目的がありました。イエス様のなさることには必ず理由があるのです。湖畔には、初めからシモンを目指して歩み来られたのです。イエス様の目的はシモン・ペテロだったのです。

湖畔のイエス様が、シモンと仲間の2艘の舟をご覧になられました。イエス様が目を留められたのは、シモンや仲間の漁師ではなく、2艘の空の舟でした。わざわざ2艘の舟と記されていることは、イエス様はシモンとその仲間たちの4人を既に視野に入れられていたことを示します。そして、イエス様はシモンの舟を選ばれました、シモンを4人の代表として用いたのです。シモンはこのことにまだ気付いていません。イエス様はシモンの持ち船の傍らに立たれると、迷うことなく、そのあるじのいない空の舟に乗り込まれました。

黙って、恰もあるじのように舟のへりを跨がれるイエス様に驚いて、シモンは洗っていた網を置いて立ち上がるのではないのでしょうか。あの方が、今日も自分に用がおありだと気付くわけです。ここでシモンは、イエス様と向かいあいます。向きあうシモンに、イエス様はお頼みになります。「この舟を少し岸から離すように漕ぎ出してくれまいか。」既にお乗りになられてからシモンにお頼みするのですから、もはや断る術はありません。シモンは訝しく思いつつも従います。この時のイエス様は、「ほんの少し」「わずかに」舟を岸から離してほしい、と頼まれたのです。たくさんのひとが押し寄せているのに、何をなさろうとするのか。しかしシモンが仰せの通りに漕ぎ出すと、岸からほんの少し距離を置くことで、群集の全体をみることができました。イエス様は岸に向かって舟板の上にお座りになり、権威あるラビのようにお話を始められます。その時、湖畔に押し合う群衆はシモンにとってどのように見えたのでしょうか。

私は、このときのシモンには、群衆が羊の群れのように見えたのではないか思うのです。羊の群れは押し合いへし合いしながら、圧のある塊をなしています。同じ方へ顔を向けて、めえめえ鳴きながら、しかも従順です。癒しも奇跡のみわざも求めず、み言葉の糧だけを求める羊なのです。岸か

ら少し離れた舟の中に座られ、群れ全体を見守るイエス様は彼らをご存じです。羊飼いは自分の羊を、羊は羊飼いを知っているのです。

羊の群集に対するその教えは、同時に船の上にいるシモンやその仲間たちの心に注がれました。一番近くにいるシモン、そしてその仲間たちに、イエス様のみ言葉を、じっと聴く幸いが与えられたのです。

お話を終えたイエス様は、更にもう一步踏み込まれます。舟にはもう一人兄弟のアンデレがいるはずですが、イエスの眼に入っているのは、シモンだけのようですし、シモンも、惹かれるようにイエス様と向かい合いました。イエス様の静かなお力に、圧倒されるような出来事が続きます。

イエス様が、「深みに漕ぎ出して網を下ろし、あなたがたは漁をなささい」と意外なことをおっしゃられます。み言葉を語られる前の、「岸から少し漕ぎ出してほしい」とお頼みになったときとは全く異なる、命令です。しかも沖の深みに行きなさいと言うのです。この「深み」という言葉は、単に「深さ」だけではありません、神の深みであり、無尽蔵な富の深さをあらわす意味を持つ言葉でもあります。沖という意味もあります。岸から少し漕ぎ出す、こととは違うのです。

シモンは驚きます。玄人の漁師である自分たちに向かって、その自分たちでさえ夜通し一匹の魚も獲れなかったのに、今はもう日も高いのに、しかも網は既に洗ってあり、いつも通り明日に備えているというのに、これから漁をせよとはどういうことか、しかも網が底に届かない深みへ行けと言われる。シモンは複雑な思いを抱え、イエス様に正直に自分たちの状況を伝えていきます。「先生、私たちは夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。」そうです。苦労をして、しかも疲れているのです。そして、シモンは続けます。「しかしお言葉ですから、私は網を下ろしましょう」。躊躇のない、早い決断です。み言葉を聴いたシモンの心には気付かぬうちにも、イエス様のみ言葉が刻まれています。み言葉は語られた神の偉大な言葉、み言葉は、語られるものなのです。創世記1:3「神は言われた『光あれ』。そうして光があった」。み言葉そのものに力があります。シモンは語られたみ言葉を受け入れました。シモンは、イエス様のあとの、最初の預言者として、こののちはイエス様と聖霊のみ言葉によって、用いられてゆくのです。「お言葉ですから。」これはシモン自

身の気持ちを超えた信仰そのもの、神のみわざなのです。

そしてシモンは一緒に乗っていたアンデレに指示を出して、二人はお言葉通りに網を下ろしました。もう一艘の舟の漁師たちは、そのような、シモンの行動を見ていたことでしょう。プロとしての自分を投げうって一步を踏み出すその行動。そして、聖書はシモンだけに集中します。イエス様がシモンに集中しているのです。

ほどなく、網には夥しい魚がかかります。洗ったばかりの手入れされた網に、轟めく様々な種類の魚は、網を破らんばかりの重量です。その個体には、網に囲い込まれることで、網が巻かれて魚が重なり合っただけで圧がかかっています。「夥しい」という語は群衆をも意味し、その多数の魚の圧は、先ほどの群集の羊の群れを思わせません。シモンは驚いて、しかし漁師ですから、本能的には心を弾ませたことでしょう、この一連の成り行きを見ていた仲間の舟に合図をしました。収穫は多く、働き手は少なかったのです。仲間は何をおいても駆けつけます。漁師であればまず、魚を獲らねばならない、網を上げねばならないのです。魚はまことに夥しく、その漁獲で網は裂け出しているし、2艘の舟は沈みそうになりました。漁師にとってよろこびであっても、それはあまりにも常識から外れた結果でした。この大漁の突然性と異常性に驚き、シモンは畏怖を感じます。ここにある「驚く」ということばにはそのような意味があります。魚に圧倒されているシモンは我に返り、自分が相対しているこのお方の、神々しいお力に、大きなおそれを抱きます。これが人間のわざではないことが、漁師である彼らにはよくわかるのです。

シモンの心が大きく動きます。ひとりの人間、シモンがイエス様の御顔を仰ぐことができず、地の底に落ちていくような衝撃で足もとにひれ伏します。神のみ前にあって、神に出会ったものの恐れです。イザヤ書6章5節で、神の現臨に触れたイザヤが「災いだ、私は滅ぼされる」といったあの恐れです。

「主よ、私から離れてください。」イエス様が「先生」から『主』に変わります。大いなるお方、私から去って行ってください、遠ざかってくださいという畏怖の気持ちです。「私はひとりの人間として罪深いのです。」シモンは自分自身の罪の告白をします。罪が裁かれ、神に滅ぼされる恐れに、罪人として、神から逃れたいのです。近づいてくださる救い主から逃げたく

なる、しかも自分が離れるのではなく、イエス様に離れてください、私を遠ざけてください。とお願いします。シモンは、自分を主のみ前にいるに値しない者ですと告白し、まことの人間として神を怖れたのです。

実際には舟の中にいるイエス様に、離れてくださいとは物理的に難しいことです。このシモンの言葉は、彼の魂の叫びなのです。

驚いたのはシモンだけではなく、仲間たち全てです。一緒の舟のアンデレ、別の舟のヤコブとヨハネ。聖書は重ねて、ヤコブとヨハネがシモンと同様に驚いたと言います。しかしここでもシモンと共にいるはずのアンデレには言及されません。シモンに集中しています。シモンただひとりがイエス様の前にひれ伏し、イエス様はシモンの心の中をご覧になって、仰るのです。『恐れることはない。』罪の告白に対する、罪の赦しの宣言です。あなたの恐れている罪は取り除かれたということです。まだ十字架につけられる前のイエス様ですが、既にシモン・ペテロの罪の償いのために死なれることは神様のみ心として決意されていたのです。すべてが神のご計画の下に捉えられているのです。

重ねて、イエス様の召命があります。「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」これはシモンに向けた、命令です。ヘブル語の未来形は、命令を意味するので、思いもかけない言葉です。彼らは漁師です。漁師が別の次元のおはたらきをするようにと命令されました。「とる漁師」ということばには、生け捕るという3つの意味があります。ひとつは、「人間を危険から生きたまま救い出す。」ひとつは、「神の王国のために彼らの魂を勝ち取るように人を捕らえる」、更には、「生命と力を回復させて復活させる。」とあるのです。「あなたは人間をとる漁師となる。」イエス様の攻めの一撃がシモンを捉え、包み込み、イエス様はじっとシモンを見つめて、踵を返します。そのお言葉を残して、舟を下りて湖畔を歩きだされたのです。その時、シモンの心に響いたお声がありました。「だから、私に従いなさい」。

シモンひとりに発せられた召命のお言葉が、チーム全員に及びます。アンデレも、ヨハネもヤコブも、それぞれ自分に向けられたお言葉として受け取りました。それぞれが1対1で語られたお言葉を聴いたのです。私たちが聖書のみ言葉を受ける時のように、ひとりひとりがイエス様と対峙しま

す。み言葉を以て「人を生け捕る漁師になる。」だからこのお方に従うのだ、と確信します。

語られたみ言葉を受けるものは、群衆の羊から、シモンと仲間たちに、そして夥しい魚に移り、またシモンたちに帰り、それからみ言葉は彼らを通して世界へ向けられます。あなたは人をとる漁師になれ。この命令により、主のみ言葉は成就するので、彼らは教会という舟に乗って人々と共にみ言葉を聴き、それから主に導かれるまま世界の深みに漕ぎ出し、世界中のみ言葉を聴くひとびとを集めて主のものとする。まさしく「み言葉の力」であります。シモンたちは、語られたみ言葉によって捕られ、み言葉を宣べ伝えることで今度はみ言葉によって捕らえる者となります。

その後の湖畔ではどうなったでしょう。昼日中に沖へ出た舟に、一回の投網漁で大量の魚があがるという顛末を、興味に駆られて湖畔で見ていた人々もいるでしょう。ゲネサレト湖畔では今、その2艘の舟が引き揚げられています。大量の魚と舟を引き揚げるのは大変な労力です。4人が力を合わせます。湖畔からの感嘆の音があがるでしょう。そして驚いたことに、彼らはそのまま、イエス様にしたがって立ち去ってしまったのです。これは私たちの生活においては、かなり異常な情景です。それまでは普通に漁をし、不漁であれば落胆し、日々網の手入れをし、淡々と暮らしていたであろう4人です。ついていってしまっただうする？このたくさんの魚は。漁の仕事は。残された家族は？でも、舟は引き揚げられていたのです。たくさんの魚は、確かに陸地に連れてこられていました。収穫は確かだったのです。彼らはイエス様にしたがうため、魚も舟も生活も、残し置いて行ったのです。すべては主のご計画によって、イエス様のみ言葉に従うことで、彼らには更に豊かな収穫が用意されているのです。

『イエス様にしたがう』こと。これは神様が絶対であり、誰よりも主イエス・キリストを愛するということです。イエス様と共に、その後ろを歩む召命のためには、持つものすべてから離れ去る必要がありました。それは心を残さずおいてゆくものなのです。必要なものは必要なときに、必要なだけ、神様が与えてくださるでしょう。私たちは、主を信じ、復活の命を信じ、この身をお捧げするものです。自分の命や体、食べるものも、飲むものも、着るものも思い悩むな、とイエス様は仰います。

私は自宅で高齢の母親を介護しながら、日々悩むのです。瞬時にものごとを忘れてしまい、いつも私を捜している母親は、昔は強くて家族を包み込む力があつたのに、今とても小さくて非力です。今、私は、私でなければだめだ、と気負っているのだろうか。母親のことを、イエス様のことより優先してはいないだろうか。このことに悩んできました。父母を敬いなさいと、十戒には示されています。私の母はキリスト者ではありません。それでも今は母親をみなさいと主は教えてくださるのでしょうか。しかし親だけではない、家族に、教会に、身の回りに病気の者がいる、障害のある者がいる、精神的に不安定な者がいる、守らねばならない子供がいる。現実の生活には、後においておけないひとはあるのです。今、捨てていけない人たちがいるのです。私が今手を放せば苦しめることになり、またほかの誰かが守らねばならない。小さな者、社会においては取るに足らないかもしれない。マルコによる福音書9章37節で、主イエス様は仰いました、私の名のためにこのような子供のひとりを受け入れる者は私を受け入れ、私をお遣わしになった方を受け入れるのである。小さな者ひとりひとりの中に、私たちがお仕えするイエス様がいらっしゃるのです。

全ては神様のご計画の下にあり、悩みも苦しきも一切をご存じのイエス様。私たちは、舟を、魚を、すべてを置いてイエス様に従ったペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレに続くものでありたいのです。罪深く取るに足らない私たちをも「あなたは人をとる漁師になる」とそれぞれを召しだしてくださるイエス様なのです。「だから従いなさい」と先を歩まれます。従います。今の私であれば、母の手を引いて従います。神様を崇め、主イエスを誰よりも愛して、従います。それによって解き放たれ、神の民として生き、新たに神の家族としてひとびとと向き合うのです。時にはわがままとなる肉親の愛からも解き放たれて、神様のみ前に立つことができますように。イエス様を愛することによって浄められ、もっともひとに、家族にも、優しくなれますように。私たちは、この世の関係を、教会の兄弟姉妹、神をまだ知らない周りの人々との関係を、神を頂点として築きなおし、誰よりも愛するイエス様の背中を見ながらその道にしたがうものとして頂くのです。神様、私たちを憐れんでください。み手のうちにお守りください。そしてご計画に従って、用いてください。